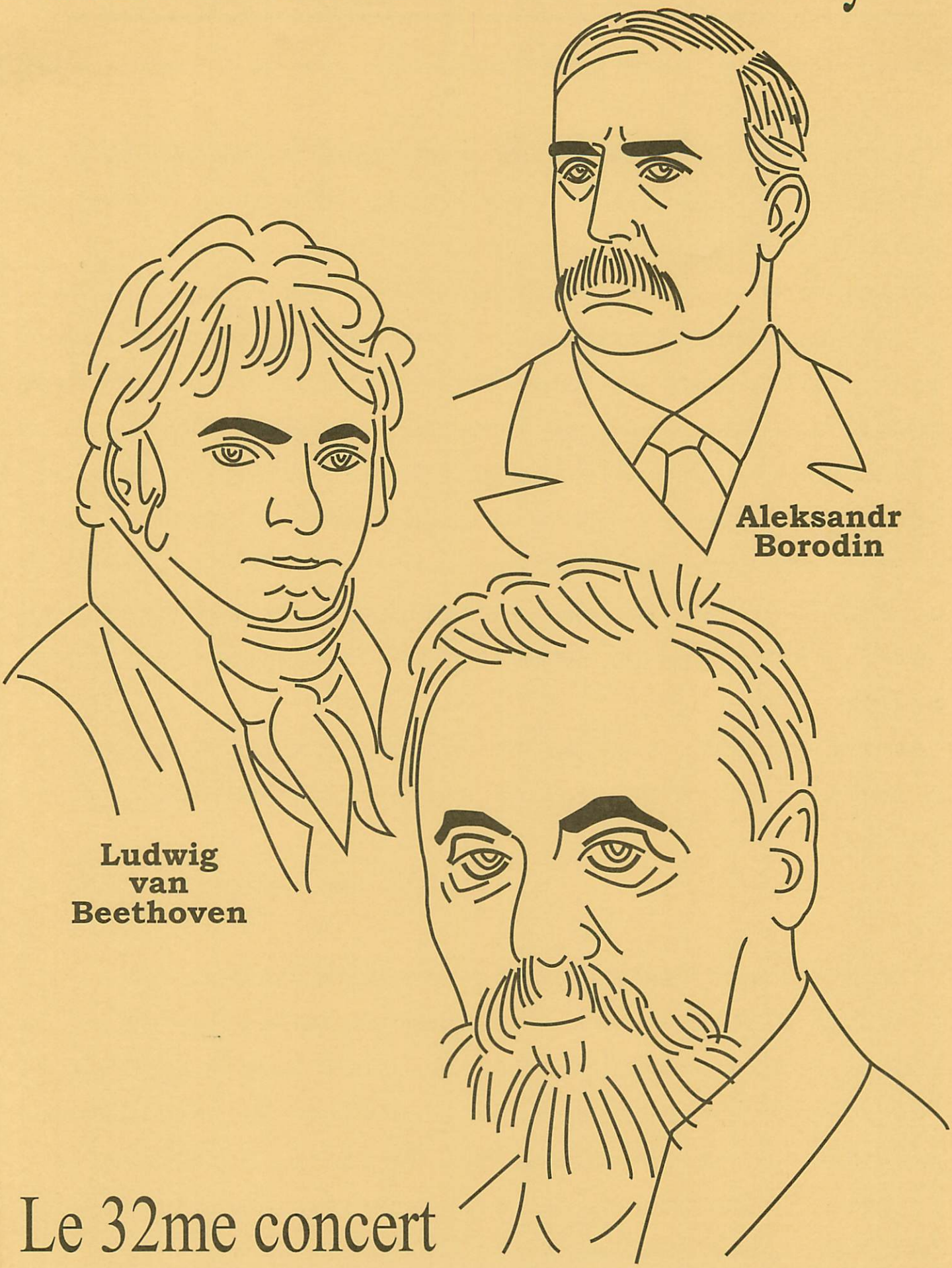
Philomusica Orchestre de Kyoto



Le 32me concert

20 janvier 2013

ごあいさつ

本日ここに「京都フィロムジカ管弦楽団」定期演奏会を開催するにあたり、ご多用にも拘わらず、多数の方々のご来場をいただきまして、誠にありがとうございます。

この定期演奏会も、メンバー諸君が仲間と貴重な、楽しい音楽経験を積み重ねて、はや第32回目となりました。今回の演奏会は、第7回、17回と指揮して下さいました、遠藤浩史氏をお迎えし、先生のご指導のもと、ますます努力と研鑽を積み重ね、魅力あふれる交響曲を披露してくれるものと期待致しております。

本日の聴き所は、フランス人で1865年生まれのPaul Dukas作曲の「交響曲 ハ長調」です。前回のアルベリック・マニャールと生誕が同じです。私はこの原稿を依頼された時にハテ？と思いました。実はもう一人デュカスと言う人物、同じフランス人でDukasより23歳ほど若いRoger-Ducasseがいたのです。しかも作曲家で両方とも就職したのが、パリ音楽院作曲科教授で、Dukasの後任としてDucasseが就任したのです。紛らわしいので、Roger-Ducasseをロジャー・デュカスと呼び、Paul Dukasをフランス語では終わりのsを英語の様には読まないので、ポール・デュカと呼んで区別しています。

デュカと言えば、すぐ目に浮かぶのは、作曲者自身の指揮で初演された、交響的スケルツォ「魔法使いの弟子」があまりにも有名です。「交響曲 ハ長調」はこの前年1896年に作曲されました。サン＝サーンスやラロと云った当時の作曲家と並ぶ19世紀の終わり、フランス国民音楽協会の交響曲の最後に位置付けるものであり、歴史的評価が非常に高いものとなっています。なお、彼の業績は作曲だけではなく、楽譜出版「デュラン」社の『ラモー全集』編集顧問を務めた功績も評価されています。

最後になりましたが、「京都フィロムジカ管弦楽団」の為に、物心両面にわたるご支援を賜りました会員の皆様方をはじめ、ご指導下さいました先生方に厚く御礼申し上げますと共に、定期演奏会のますますの発展を祈りまして、ご挨拶とさせていただきます。

京都フィロムジカ管弦楽団顧問　　和田 之宏

「音楽は聴く人のためにある」と私は団員によく話しています。音楽行為は作曲 - 演奏 - 鑑賞の三つで成り立っており、私たちはこのまんなかの部分を担当していますが、ここで作曲家の意図を聴衆にいかに伝えるかが奏者の仕事となり、これが結構むずかしいのです。私たちアマチュアはどうしても自分中心になりがちです。選曲も自分たちが演奏したい曲を集めてはプログラムを組んでいますし、曲の演奏も自分たちの演奏しやすい形になりやすいのです。しかし聴衆はその作曲家の作品を聴きにきているわけですから、奏者の都合は関係ありません。音楽と向き合うとき、決して奏者の自己満足で終わるような演奏にならないよう気をつけなければなりません。聴く人の立場で演奏する。きょうはそんな思いでみなさまに音楽を届けたいと思います。最後までごゆっくりお楽しみください。

京都フィロムジカ管弦楽団団長　　長岡 武志

京都芸術センター制作支援事業

京都フィロムジカ管弦楽団　第32回定期演奏会

2013年1月20日（日）　午後2時開演

滋賀県立芸術劇場　びわ湖ホール　大ホール

1:15～　ロビーコンサート

Programme

ボロディン（1833-1887）／歌劇『イーゴリ公』序曲
Александр　БОРОДИН : «Князь　Игорь» - Увертюра

ベートーベン（1770-1827）／交響曲第5番ハ短調
Ludwig　van　BEETHOVEN : Symphonie　Nr.5　c-moll　op.67
Ⅰ. Allegro　con　brio
Ⅱ. Andante　con　moto
Ⅲ. Allegro
Ⅳ. Allegro

― 休憩 ―

デュカス（1865-1935）／交響曲ハ長調
Paul　DUKAS : Symphonie　en　ut　majeur
Ⅰ. Allegro　non　troppo　vivace, ma　con　fuoco
Ⅱ. Andante　espressivo　e　sostenuto
Ⅲ. Allegro　spiritoso

指揮　遠藤　浩史

お客様へのお願い

～誰もがより楽しめる音楽会にするために、皆様のご協力をお願いいたします～

●携帯電話･アラーム付腕時計など音の出る機器をお持ちの場合は、電源を必ずお切りください。

●演奏中の私語は固くお断りいたします。

●客席での飲食、喫煙、写真撮影、許可のない録音・録画は固くお断りいたします。

●補聴器が異常音を発することがございます。ご使用の方はご注意願います。

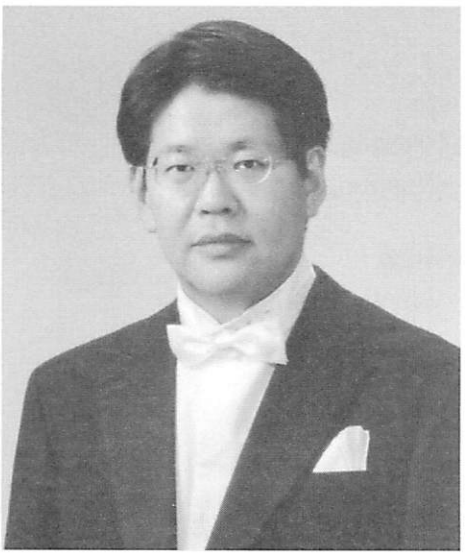
●演奏中の客席へのご入場は固くお断りいたします。

●「咳(せき)エチケット」にご協力ださい。咳(せき)、くしゃみがこらえられないときは、ハンカチやタオル等で口と鼻をおおうよう、お願いいたします。なお、演奏中の「のど飴(あめ)」の使用は、開封の音がかえって周囲のお客様のご迷惑になりますので、ご遠慮願います。

●演奏者が音を出していなくても音楽が続いている場合がありますので、物音をお立てにならないよう、ご注意ください。

指揮者

遠藤　浩史　（えんどう　ひろし）



大阪生まれ。大阪音楽大学ピアノ科、桐朋学園大学オーケストラ指揮専攻科に学ぶ。指揮を小澤征爾、尾高忠明、秋山和慶、岡部守弘の各氏に、ピアノを山田朋子氏に、二重奏及び室内楽を中山朋子、間宮芳生、江藤俊哉、金昌国の各氏に、作曲を三善晃氏にそれぞれ師事。

群馬交響楽団、関西フィルハーモニー管弦楽団、東京ニューシティー管弦楽団、東京合唱協会などに客演し、好評を博す。

1992年、南スイスのルガーノでの「マスタープレイヤーズ講習会」においてマスタープレイヤーズオーケストラを指揮し高い評価を得ると共に、R．シューマッハー氏により指導を受ける。1996年7月にはソンバトヘイ（ハンガリー）での国際バルトークセミナーにてファイナルコンサートの指揮者に選ばれサヴァリア交響楽団を指揮し絶賛を博す。1999年8月にはウィーンとブダペストで行われた「日独楽友協会指揮者セミナー」にてK．レーデル氏に師事。

アマチュアオーケストラや合唱団の指揮及び指導実績も多く、たくさんの音楽愛好家の方々から高く評価されている。また、エレクトーンアンサンブルによる電子オーケストラとの共演も積極的に取り組み、特にピティナピアノコンペティション協奏曲部門や東京六大学ピアノコンサートを含む各種演奏会の指揮、さらには2006年2月にはヤマハ銀座店において特別講座なども担当。

また演奏頻度の少ない作曲家の作品も積極的に紹介することにも力を注ぎ、1995年にはP．マッカートニーのクラシック音楽の分野の大作「リバプール・オラトリオ」を、また2005年6月には京都フィロムジカ管弦楽団定期演奏会においてエストニアの作曲家エドゥアルド・トゥビンの交響曲第4番「叙情」を日本人指揮者として初めて指揮し大反響を呼んだ。

1999年11月11日、若手指揮者シリーズ「21世紀プロジェクト・第4弾」として、オーチャードホールにて新星日本交響楽団（現：東京フィルハーモニー交響楽団）を指揮し絶大なる評価を得、その模様はNHK、スカイパーフェクTVでオンエアされ、また「音楽の友」をはじめとする様々なメディアにて、賛嘆の記事が寄せられた。

2004年12月9日、ロンドン、バービカンホールにてイギリス室内管弦楽団を指揮し大成功を収め、海外メジャーデビューの第一歩を踏み出した。

現在、東京合唱協会指揮者、日本演奏連盟会員。

http://www.endo-hiroshi.net/

印刷のことなら

大　地　社

〒602-0858
京都市上京区河原町荒神口上ル二筋目東入ル
ＴＥＬ（075）231－1727㈹
ＦＡＸ（075）256－4604

ロビーコンサート

13:15 より

ブリテン／聖エドマンズ墓地のためのファンファーレ

Tp.：遠藤、北山（武）、井上

…20 世紀イギリスを代表する作曲家ベンジャミン・ブリテンの前衛的な作品です。まるで無関係に聞こえる 3 つのファンファーレが混然一体となる妙味をお楽しみください。会場のざわめきまでが音楽の一部となることでしょう。（遠藤）

フランセ／ディベルティスマン　より　第１、２楽章

Ob.：栗山　Cl.：関　Fg.：石塚

…洒落っ気とユーモアに富み、洗練された作風で知られるフランスの作曲家フランセ。今回はオーボエ・クラリネット・ファゴットのトリオダンシュ(Trio d'Anches)と呼ばれる、リード楽器のみの編成で演奏します。リード楽器の暖かく多彩な音色をお楽しみください。（関）

デュカス／「ラ・ペリ」　より　ファンファーレ

Tp.：北山（武）、井上、遠藤　Hr.：黒田、真浜、北山（絵）、長岡　Tb.：宮下、中村、藤井（舞）　Tu.：中塚

…デュカスの名を聞いて連想される楽曲は多くありませんが、この短いファンファーレには聞き覚えのある方が多いかもしれません。交響曲ハ長調の 16 年後に書かれた、短いながらも重厚な一曲をお楽しみください。（黒田）

曲目解説

Tp.：遠藤　啓輔

ボロディン／歌劇『イーゴリ公』序曲

19 世紀ロシアの作曲家アレクサンドル・ボロディンは医科大学教授という多忙な公務があったため、当然ながら遅筆にして寡作。オペラ『イーゴリ公』は 18 年の長きにわたり断続的に作曲がなされたが、結局未完のままボロディンは急死した。現在上演されているオペラ『イーゴリ公』は、ボロディンが残したスケッチにリムスキー・コルサコフとグラズノフが補筆して上演可能にしたものだ。本日演奏する序曲は、ボロディンが生前ピアノで弾いて聴かせたものをグラズノフが記憶を頼りに再現したと言われる。

このオペラは、12 世紀末に成立した作者不詳の短い叙事詩で中世ロシア文学の傑作とされる『イーゴリ遠征物語』を底本にしている。この物語には同時代にあったイーゴリ遠征事件が描かれており、オペラにはさらに、物語には描かれなかった史実も（おそらく年代記などの史料を参照して）まじえられている。舞台は黒海の北に広がる平原、現在のウクライナ。この地には 9 世紀末にキエフを中心とする公国の連合体ともいうべき国「キエフ・ルーシ」が興り、黒海に注ぐ西の大河ドニエプル川の水運を利用した交易で栄えるとともに、キリスト教を基調として文化的基盤を整備していった。しかし、12 世紀になると公国同士の争いが深刻化し、さらに黒海の北に広がるステップ地帯を跋扈する草原の遊牧民・ポロヴェツとも交易を巡って対立が深まっていった。しかもルーシの諸公たちは、ポロヴェツと戦う一方で、傭兵としてポロヴェツ人を雇い入れたり、対立する公国を牽制するためにポロヴェツの有力者と同盟を結んだり政略結婚したりするといった対応を取り、混乱は泥沼化していく。こうして国力が低下したキエフ・ルーシは結局 13 世紀前半にモンゴルの侵攻によって滅亡するのだが、イーゴリ遠征はその直前、12 世紀末に起きた出来事である。

1185 年、キエフ・ルーシの小さな公国の主・イーゴリ公は、功名心に燃えてポロヴェツ遠征を企て、黒海に注ぐ東の大河ドン川を目指す。「生きて虜囚の身となるよりは斬り死にするこそ我らが面目！」と威勢よく出陣す

るもポロヴェツ軍に大敗を喫し、イーゴリはあえなく「生きて虜囚の身」となる。イーゴリの公国では、留守を預かるイーゴリの妻が夫の不在を嘆く。一方、ポロヴェツの将コンチャク・ハンに捕らわれたイーゴリは、捕虜の身でありながらも、まるで大切な客人であるかのようにコンチャクに丁重にもてなされる（イーゴリとコンチャクは、かつて同盟を結んでいた間柄であった）。が、イーゴリは内通するポロヴェツ人の手引きを得て脱走。ルーシに帰還し歓迎される。また、父に従って参戦しやはり捕虜になっていたイーゴリの息子は、コンチャクの娘と結婚。イーゴリの息子はその後、妻と子を連れてルーシに帰還する。

これがイーゴリ遠征事件のあらましだが、こうしてみると、イーゴリ公はおよそ英雄譚の主人公にふさわしい大人物ではない。所詮はキエフ・ルーシの中で勢力争いに明け暮れる諸公の一人に過ぎないし、物語の中でもイーゴリの所業に批判的な言説がなされる。どうやら遠征物語の作者は、イーゴリ遠征事件を題材として、諸公の内紛を非難しキエフ・ルーシの結束を訴えようとしているようだ。同時に、ポロヴェツ人を「邪教徒」と蔑む書き方が頻繁にみられることから、キリスト教の隆盛とキリスト教による秩序回復を祈念しているようにも見える。なお、オペラの中では、イーゴリ公は高潔で勇猛果敢、領民に慕われ敵将までも惚れ込む大人物、と設定されている。敗軍の将の脱走という物語の結末が、あたかも大団円であるかのような様相を呈するのは、詩と音楽の魔力のなせる業だ。

本日演奏する序曲は、オペラの中の様々な音楽が素材として使用されており、表情豊かな小品となっている。暗鬱とした序奏は、大敗して捕虜となり、望みも救いも失ったイーゴリの嘆き。同様に望みも救いも失いつつあるキエフ・ルーシの混迷をも象徴しているか。突如として金管群が呼応するように雄叫びを上げるが、これはポロヴェツ軍の出陣ラッパだ。主部に入るとクラリネットが楽しげに歌うが、これはコンチャク・ハンの娘がイーゴリの息子を口説くアリア。コンチャクの娘とイーゴリの息子の結婚は政略結婚と思われるが、少なくとも音楽を聴く限りボロディンは、恋のために敵味方の隔てなく行動する天真爛漫な姫君としてコンチャクの娘を描いているように感じる。続くヴァイオリンによるヒロイックな旋律は、捲土重来を誓う捕虜イーゴリ決意のアリア。少なくともオペラの中では理想的な英雄として描かれているイーゴリにふさわしい力強い歌だ。ホルンの美しいソロは、遠く離れ離れになりながらも互いを思いやるイーゴリ夫妻のアリア。特にイーゴリの賢妻が大自然に向かって夫の不在の悲しみを歌う場面は、イーゴリ遠征物語の白眉とも言われる。中間部で聞こえる騎行を模した軽快なリズムは、ポロヴェツの猛将コンチャク・ハンを象徴している。草原を自由自在に疾駆する騎馬民族の王者を楽しげに描く。前述の主題たちが再現された後、激しく盛り上がってオペラの幕が開ける。

（参考文献）木村彰一訳『イーゴリ遠征物語』岩波文庫，1983／新版世界各国史『20　ポーランド・ウクライナ・バルト史』『22　ロシア史』山川出版社

ベートーベン／交響曲第5番ハ短調

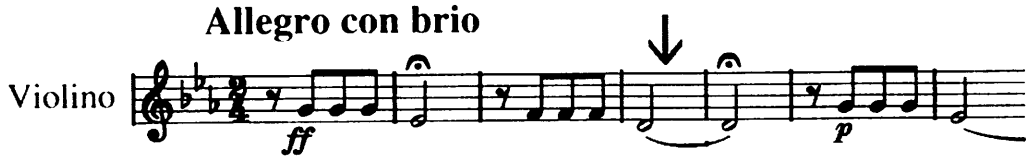
僕がベートーベンの交響曲を解説するときに毎回書いていることだが、ベートーベンの交響曲はとにかく冒頭が凄い（冒頭から一音たりとも聞き逃すことができない、と言い換えることも可能）。今回演奏する第5交響曲もその典型だ。3つの八分音符による、単純でありながら強い要撃を与えるリズム(注1)はその後の作曲家たちを呪縛し続けた。フィロムジカがこれまで演奏してきた作品を振り返っても、シベリウス、ロット、マーラー、ブラームス、（そして今日、後半に演奏するデュカス）など錚々たる作曲家たちがこのリズムを引用しており、音楽史に与えたインパクトの強さがうかがえる。そして、この冒頭のリズムが微妙に姿を変えながら曲全体にちりばめられ、4つの楽章を緊密に結び付けていることはもはや言うまでもない。この曲は連結された第3楽章から第4楽章への劇的な流れが聴衆を魅了するが、不可分に結びついた楽章の連結体という性格は、冒頭リズムによる全曲の統一という側面からも実現がなされている。

そしてこのリズムは冒頭で2度繰り返されるが（**譜例1**）、1回目と2回目は微妙に異なる。どちらも3つの八分音符の次の音はフェルマータで伸ばされるのだが、2回目は1小節長く書かれているのだ（4小節目。**譜例1**

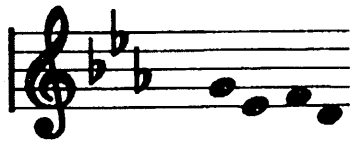
の矢印部分)。楽譜を忠実に再現しようとすれば、当然 2 回目の伸ばしの方が長くなることになる。同じリズムの繰り返しのように見えて微妙に違う、このちょっとした違いが聴衆を軽く当惑させる。僕の父はこの曲を聴き終わるといつも「2 回目の伸ばしの方が長く感じられたが、気のせいだろうか？」といぶかしんでいるが、これは極めて正しい感覚なのだ。冒頭リズムの衝撃が癒える間もなく、繰り返しの微妙な違いに「あれっ？」と思っていると、第 1 楽章はいつの間にかスピーディーに展開している。聴衆は当惑の気持ちを残したまま、乗り遅れまいと慌ててアレグロの音楽の鑑賞態勢を取らざるを得ない。実にスリリングな音楽鑑賞体験である。実はこの「4 小節目」は自筆譜には無く、印刷段階でベートーベンが指示して追加したものだ(注2)。まさにベートーベンこだわりのイタズラといえよう。このトリックが 21 世紀に至っても有効であることを泉下のベートーベンが知ったら、「してやったり」とほくそ笑むに違いない。

そしてこの冒頭で僕が重要だと思うのは音程関係だ。冒頭を、リズムを除外して音程だけ記譜すると、**譜例 2** のようになる。音がジグザグに上下するこの旋律線は、16 世紀から 17 世紀にイタリアで流行したロマネスカ音型や、音符が十字を描くように配列された十字架音型を彷彿とさせる。20 世紀のミニマルミュージックのように前衛的でありながら、その旋律線は遠く 16 世紀にも向いている。まさに過去から未来までを併呑した破格の音楽だ。また、十字架音型はバッハをはじめ作曲家が信仰告白の印として使った。冒頭に信仰の証と言うべき十字架音型に似た旋律線が用いられていることと、神を象徴する楽器であるトロンボーンを使用したこととが無関係であるとは僕には思えない。しかも、トランペットが吹く「ド・ミ・ソ」に隠れて分かりにくいが、トロンボーンが登場して最初に吹く音型は十字架音型的なのだ (**譜例 3**)。そして、冒頭のリズムと同様、十字架音型風の音の動きも全曲の要所で顔を出す。第 2 楽章第 1 主題の雄大な旋律の後半部分、第 3 楽章から第 4 楽章へ向かうブリッジにおけるヴァイオリンの緊張に満ちた動き、そして終楽章におけるホルンと木管による勝利の雄叫びなどは、一聴してそれと気づくことができよう。

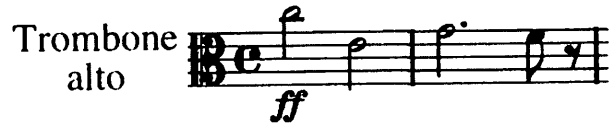
冒頭わずか 5 小節にこれほどの内容を盛り込んだベートーベン、曲全体の中にいまだ解かれていない謎が多数隠されていることは疑いない。



譜例 1　第 1 楽章冒頭



譜例 2



譜例 3　第 4 楽章冒頭(第 1 トロンボーン)

第 1 楽章：冒頭 (**譜例 1**) で提示された簡潔なリズムで楽章全体を貫徹した、ミニマルミュージックのような不滅の前衛性を誇る。第 2 主題も伴奏に冒頭リズムが使われているため、楽章全体をほとんど同じテンポで突き進む。が、それだけに、一瞬挿入されたアダージョのオーボエ・ソロに人間味のある魅力を感じさせる。

第 2 楽章：「動きのあるアンダンテで」とテンポが指定されており、程好い推進力を持つ。1 楽章とは対照的に息の長い旋律が朗々と歌われるが、伴奏音型などにさりげなく第 1 楽章冒頭のリズムが使われている。楽章全体の調性はくすんだ響きを特徴とする変イ長調だが、ファンファーレ風に鳴らされる明朗なハ長調の響きがかえって印象に残る。これは終楽章で劇的に提示されるハ長調の布石であろう。楽章終盤で、ファゴットのちょっとおどけたソロが挿入されるのが面白い。ベートーベンならではのユーモアだ。

第 3 楽章：楽譜に明示されていないがスケルツォに相当する楽章。スケルツォ主部は、激しく上下に揺れる弦楽器を中心とした動機と、1 楽章冒頭リズムによる管楽器を中心とした動機が交錯する。対してトリオは低弦から

始まる嵐のようなフーガ。この主部とトリオがリピートやダ・カーポによって無数（と思われるほど）に繰り返され、聴衆は迷宮をさまようような不安にさいなまれることになる。楽章後半は終楽章への連結部で、この曲の歴史的価値を決定づけたとも言える聴きどころである。正確な4小節周期による安定した進行でありながら、そこでは潤いを失ったような乾いた旋律が鳴らされ、均整美に満ちた荒涼たる光景、という異様な音楽体験をすることになる。迷宮を徘徊したあげくたどり着いたのは荒野、と思っていると、突如として瑞々しい生命力が吹きあがり、第4楽章へなだれ込む。

第4楽章は冒頭で「ド・ミ・ソ」が強く鳴らされ、この楽章がハ長調の明朗な輝きに満ちた音楽であることを極めてわかりやすく宣言する。当時は世俗的管弦楽作品に使われることが少なかったトロンボーンのほか、ピッコロ、コントラファゴットといった特殊楽器も導入され、それらが極めて重要な働きをする。再現部は第3楽章の終わりから再現され、劇的な終楽章の開始を再体験できる。第9交響曲の終楽章で先行楽章の一部をそっくりそのまま回想するアイディアの源泉になっているのかもしれない。最後は四分音符をこれでもかとばかりに打ち付ける扇情的なエネルギーを放つが、ここにも1楽章冒頭リズムが隠されている。

（注1）このリズムについて、ベートーベンが秘書シントラーの詮索に答えて「このように運命が扉を叩く」と答えたという逸話が有名だが、その一方で、このリズムは鳥の声の模倣だという説もある（橘西路訳編、ベルリオーズ『ベートーヴェンの交響曲』角川文庫、1959。169ページ）。仮にベートーベンがシントラーにそのように語ったのが事実であったとしても、ユーモア好きのベートーベンが詮索好きのシントラーをからかって言ったように思われてならない。聴衆としての僕の経験上、「作曲者が自作について語った」とされている言葉は自由な鑑賞の妨げになる場合が多い。

（注2）朝比奈隆・金子建志『朝比奈隆　交響楽の世界』早稲田出版、1991

デュカス／交響曲ハ長調

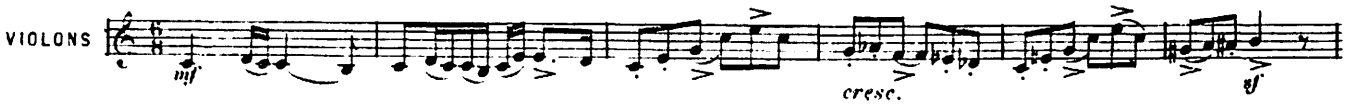
ポール・デュカスはパリに生まれパリで学びパリに没したパリジャンだ。その一方で、ベートーベンやヴァーグナーなどドイツ音楽の影響も受けた。デュカスの作風は、パリジャンの洒脱さと、ベートーベン風の厳格な古典的作曲技法や構築美が理想的に融合したものと言えよう。（本日はベートーベンの後にデュカスをお聴きいただけることになる。ベートーベンの作風がいかにデュカスに受け継がれているか、是非ご注目いただきたい）。そしてデュカスのオーケストラ作品は、とりわけ色彩感が豊かで、いかにもフランス音楽らしい。彼はパリ音楽院時代にオーケストラでティンパニを叩いていたこともあって、オーケストラの現場を知り尽くしているようだ。デュカスのもっとも有名な作品である『魔法使いの弟子』を思い出していただければ、彼の音楽の構築の堅牢さと色彩の豊かさがいかに凄いか、ご納得いただけることと思う。

本日演奏する交響曲ハ長調は、その『魔法使いの弟子』とほぼ同時期の作品だ。まだ30歳だったデュカスの、若さあふれる意欲作だ。音楽院時代の学友・ドビュッシーはデュカスについて、音色の巧妙さ、作曲法の手堅さと自由さ、曲の発展の見事さを評価していたらしいが、この交響曲はそうしたデュカスの魅力が存分に表れた作品だ。ほとんど特殊楽器を用いない簡潔な楽器編成でありながら瑞々しく色彩感豊かな響きがする秘密は、相互に引き立てあう主旋律と副旋律に絶妙なバランスで楽器を配していることにあり、手堅い作曲技法と巧妙な音色が表裏一体の関係になっている。さらに、交響曲の伝統的な形式美を踏襲しつつも（スケルツォを欠いているが、それとてフランクのニ短調という偉大な先例がある）、例えばソナタ形式の再現部を大幅に拡大するなど、形式から逸脱しようとする志向性が見られ、そのエネルギーが途方もない魅力を生み出している。

なお、この曲は楽譜の問題が未整理のまま残されている。スコア（総譜）の中に整合性の取れない記述がみられるほか、スコアとパート譜の違いも多々見られる。しかも、スコアはパート譜への書き込みを反映して細部の表情記号を追記した、と想像される箇所も散見され、単純に「パート譜をスコアに合わせればよい」というわけにもいかなさそうだ。最終的な判断のよりどころは結局「演奏者の美意識」ということになり、従って演奏者に

よりさまざまな解釈が起こりうる。この曲が好きで頻繁にＣＤを聴き込んできた、という方にはイメージと違う演奏になっているかもしれないが、「本日の演奏会でしか聴けない解釈」をお楽しみいただければと思っている。

第１楽章：明朗なハ長調の和声を一打ちして華々しく始まる。アレグロのテンポ指定に加えて「火のように」という激しい表情指定もなされており、青年作曲者の若々しいエネルギーが燃えたぎっているようだ。ヴァイオリンが控えめの音量で提示する主題（**譜例 4**）が第 1 主題であり、ここにこの曲の旋律の魅力が集約されている。前半 2 小節では主音であるドの周囲を行き来する窮屈な動きをするが、3 小節目でハ長調の分散和音が花開き、突如明るい光が入ったように見える。この見事なコントラストがデュカスの魅力だ。さらにリズムに目を転じると、基本的には装飾音符を使わない 8 分の 6 拍子を忠実に守った端正な動きなのだが、要所に細かい 16 分音符の動きやシンコペーションを挿入してギクシャクした動きの面白さを見せる。特にシンコペーションはデュカスの面白さの肝となり、この後も場面転換など要所要所でシンコペーションが重要な働きをする。第 1 主題部だけでかなりの長さを持ち、その後半部分では譜例 4 とはかなり様相を異にした旋律が堂々と歌われる。



譜例 4　第 1 楽章第 1 主題

第 2 主題は分散和音を基調にした伸びやかで穏やかな歌。これが徐々に切迫感を増していき、第 1 主題部と同様の火のように激しい音楽に戻る。低音主体の堂々たる行進曲風の主題で、この部分を「第 3 主題」と呼んで良いのではないだろうか。デュカスの交響曲について分析したものは少ないし（おそらく僕が知らないだけなのだろうが)、交響曲を 1 曲しか残さなかったデュカスに「彼の交響曲群に一貫するスタイル」などあり得ないので、この分析が正しいのかどうか不明だが、この主題が特別な存在感を放っていることは疑いない。

第 1 楽章は交響曲の定石通りソナタ形式で書かれていて、展開部を挟んで、3 つの主題がそれぞれ順番に再現される。ただし、第 3 主題が拡大され、そのままコーダに突入する。コーダはこれまでにも増して火のように激しく燃えるが、いきなり幻想的で穏やかな音楽が挿入され、めまいを覚えるほどのコントラストを見せる。この幻想的な部分では、似ているようで実は微妙に異なるリズムが並置されたり、ズレているかのようにさえ感じられるシンコペーションが打ち込まれたりと、曖昧模糊としたオーケストレイションが施されている。提示部・再現部が、旋律と伴奏がガッチリ噛み合う音楽であるだけに、そのコントラストの面白さは絶大だ。この曖昧模糊とした音楽が急激に生命力を増して再び怒涛の奔流となるが、このまま突っ切ると思いきや、最後に急ブレーキをかけて聴衆を面食らわす。青年作曲家デュカスはどこまでも挑発的だ。

第２楽章：田園情緒にあふれた穏やかな楽章。この楽章にのみ、イングリッシュホルンが導入され、その野太い音が素朴な土臭さを一層深めてくれる。2 つの主題部が交互に繰り返される簡潔な形式を取っているが、主題部間をつなぐ経過部分がむしろ魅力にあふれているため、形式の枠をはみ出した壮大な魅力がある。

冒頭、木管の軽くはじけるような和声に乗って、ホルンが隣り合う音を行き来するおぼろげな動機を奏する。牧神の目覚めともいうべきか。これを受けてヴァイオリンが、ホルンの動機とは対照的に音が大きく跳躍する、伸びやかでしかし愁いを帯びた旋律を奏でる。第 1 主題部はこの 2 つの要素が絡み合って進行するが、むしろこの楽章の白眉は第 1 主題の後に訪れる。弦楽器がピアニシモで、神の垂下を思わせるような下降音型による美しいコラールを聴かせるのだ。僕はデュカスの人となりを全く知らないけれど、この一瞬の音楽には彼の信仰告白が込められているような気がする（ちなみに、信仰心の篤い作曲家の一人に数えられるメシアンはデュカスの教え子だ)。それに続く、第 2 主題を導入する一瞬の音楽もまた素晴らしい。木管がまるで牧神の笛のように素朴に歌うと、まるで動物たちがそれに答えるようにホルンが低くうなる。冒頭が牧神の目覚めならば、ここは動物たちの目覚めだろうか。こうして導かれる第 2 主題は、「いきいきと（animato)」と添え書きされた、程好い推進力のあるものだ。第 1 楽章第 1 主題（**譜例 4**）の後半部分の変化形と見ることもでき、各楽章の綿密な連関を見ることができる。この楽章のクライマックスは、2 つの主題ではなく、経過部分で聴かれた下降音型のコラールで形成される。提示部では弦楽器のみで演奏されたコラールが、ここでは管楽器を主体とした大オーケストラ

で壮麗に演奏され、きらめくような高音の伴奏が華を添える。クライマックスの後は2つの主題が再現されるが、オーケストレイションが提示部よりも大幅に複雑になっている。コーダは、弱音器を付けたホルンが遠くからかすかに聞こえてくるように歌うという、ベートーベンの田園交響曲の最後を彷彿とさせる音楽になる。以前、ベートーベンの田園交響曲を解説したときにも書いたが、管楽器の弱音器は夜を表現する場面に使われた可能性があるという（佐伯茂樹『名曲の「常識」「非常識」　オーケストラの中の管楽器考現学』音楽之友社　による）。そうすると、デュカスの第2楽章の最後も夜なのだろうか、この楽章は牧神の目覚めから眠りまでを描いたものなのだろうか、などと想像が膨らむ。そう思うと、最後の響きはリヒャルト・シュトラウスのアルプス交響曲の日暮れの場面を先取りしているようにすら感じられる。

第3楽章：第2楽章でも部分的に使用された「小さいトランペット」が楽章全体にわたって使われる。D管の楽器が指定されていることから、デュカスが想定したのは現代のD管トランペットと同じ管長の楽器だと思われる。ただ、この時代は長いF管トランペットが「普通のトランペット」だった時代だからこそD管が「小さいトランペット」であり得た。現代は、短いC管トランペットが当たり前の時代なので、D管トランペットも普通のトランペットの一種でしかない。大きなトランペットと小さなトランペットを組み合わせたピラミッド的な音響を疑似的にでも再現するために、僕は「小さいトランペット」パートをD管よりも短いA管ピッコロトランペットで吹こうと思う。時代考証的には問題があるかもしれないが、むしろデュカスの意図にかなっていると信じる。

第1楽章同様、3つの主題を持つソナタ形式を基調にしているようだが、形式の枠を大幅に逸脱して音楽が噴き出してくるような魅力がある。推進力にあふれた第1主題、第1楽章第1主題（**譜例4**）の後半部分と同様の伸びやかなアーチを描く第2主題、低音で演奏される厳めしい第3主題、と順に提示されるが、その端々からこぼれ落ちるように短い旋律があふれ出しており、それらがとてつもなく魅力的だ。

時に厳格に、時に幻想的にと様々な表情を見せる展開部を経て再現部に入るが、提示部と同様に再現されるのは第1主題だけで、それ以降は既出の主題群を要素とした巨大で複雑な音楽となっている。凄まじい興奮の中、金管の上昇音型でクライマックスを迎える。第2楽章のクライマックスが神の降臨を思わせる下降音型だったのに対し、上昇音型によるフィナーレのクライマックスは、天に近づこうとする人間の祈りだろうか。快速のコーダでは、恐らくベートーベン5番の冒頭に源流を持つと思われる3つの八分音符が執拗に打ち込まれ、最後はハ長調の和声で締めくくられる。ハ長調と言えば、ベートーベン5番の終楽章もハ長調だ。執拗なリズムの繰り返しと言い、調性といい、このデュカスの交響曲は、ベートーベンの5番の魅力をうまく取り入れた作品の一つと言えよう。ベートーベン5番とデュカスの交響曲、これを続けてお聴きいただくことで、ほぼ1世紀の時を経た、音楽史の偉大な流れをお楽しみいただきたい。

京都フィロムジカ管弦楽団「友の会」会員様ご芳名

松村 里香様	吉田 寛子様	古川 宏様
杉本 幸子様	西坂 壽美子様	竹野 繁也様
安藤 美知穂様	小松 朋美様	出村 勝正様
遠藤 時金様	鈴木 一俊様	河内 尚和様
井谷 宏美様	辻 良治様	森永 千一様
鎗本 和弘様	西 英子様	西村 浩輔様
谷口 佳隆様	浅野 節子様	宮下 哲様
吉田 育弘様	金谷 一紀様	

2002年4月に発足しました「友の会」は上記会員の皆様方よりご支援いただいております。

京都フィロムジカ管弦楽団
Philomusica Orchestre de Kyoto

Violon solo
澤田　知栄子※

Violons
小幡　拓也
新庄　元子
森　亜紀
中居　楓子
山口　陽平
天澤　天二郎・
飯田　俊也・
田村　うらら・
西田　賢仁・
西村　祐司・
藤岡　茉耶・
堀部　麻子・
増岡　昌幸・
安江　絵美子・
安原　由克子・
吉川　正剛・
渡辺　達之輔・
内田　佳子※
澤田　知栄子※
宮宇地　秀和※
渡邉　隆寿※

Altos
河井　奈美・
國分　絵里香・
高原　友洋・
八軒　静香・
古田　直道・
森園　博章・
吉川　昌毅・
池田　圭※
久保　将哉※

Violoncelles
多田　進
小野　健太郎・
鈴木　弦太郎・
秦野　貴生・
松浦　悟子・
岡野　正義※
木坂　有男※
矢野　卓也※

Contrebasses
茂原　尚樹
田中　郁太郎
鳥山　拓
中平　明江
藤井　輝之
細木　蘭子・
後藤　志帆※

Flûtes
鳥山　梓
林　由起
山口　佳美
上野　沙季・
(Petite flûte)
島　秀彰・
(Petite flûte)
谷本　佳織・
松岡　良治・

Hautbois
栗山　才子
(Cor anglais)
大王　恵里子
丸井　しずか

Clarinettes
黒田　菜穂子
関　英子
川辺　達也・
藤井　大樹・

Bassons
石塚　有里子
濱田　ひとみ
桃川　大毅※

Contrebasson
近藤　紀宏※

Cors
北山　絵里
黒田　直樹JAMES
長岡　武志
真浜　将吾
山影　つぐみ

Trompettes
遠藤　啓輔
(Petite trompette)
北山　武志
井上　美奈子※

Trombones
中村　三鈴
宮下　秀行

Trombone-basse
藤井　舞

Tuba
中塚　隆介※

Timbales
籾井　渉※

顧問
和田　之宏

団長
長岡　武志

事務
西村　浩
邑橋　明子

・：団友
※：客演奏者

弦トレーナー

岩井　英樹　　名古屋芸術大学卒業。ヴィオラを西岡正臣、ウルリッヒ・コッホ、ジークフリート・ヒュアリンガーの各氏に師事。1997年より大阪フィルハーモニー交響楽団ヴィオラ奏者。

管トレーナー

山崎　雅夫　　京都大学卒業。現在、京都大学交響楽団金管トレーナー。トランペットをC.マクベス、A.ハーゼス、M.アンドレの各氏に師事。

京都フィロムジカ管弦楽団からのお知らせ

第３３回定期演奏会

２０１３年6月１６日（日）　京都府長岡京記念文化会館
チャイコフスキー／交響曲第５番
ドヴォルジャーク／交響曲第５番

新入団員随時募集中

～私たちと一緒に演奏しませんか？ まずはお気軽に見学にお越しください。 団員一同、お待ちしております。～

私たち京都フィロムジカ管弦楽団は、近畿のみならず全国各地に在住する団員が週に一度京都に集まり、力を合わせて活動しています。定期演奏会だけでなく、アンサンブルなども楽しんでいます。
「一緒に演奏したい！」という皆様のご参加をお待ちしています。

＜募集パート＞

ヴァイオリン・ヴィオラ・チェロ　**（弦楽器急募！！）**
フルート・ファゴット
ホルン・トランペット・打楽器

〔練習日時〕毎週日曜日　午後１時～午後５時　　春と秋に練習合宿あり（大津市内）
〔練習場所〕京都芸術センター　および京都市内、大津市内各所
〔諸 費 用〕　活動費：3,000 円/月　合宿費：10,000 円程度　演奏会参加費：20,000～30,000 円（学生は半額）

入団・見学に関するお問い合わせ先　E-mail：recruit@kyotophilo.com

「友の会」会員随時募集中

フィロムジカの活動を応援してくださる方を募集しています

【年会費】　１ 口　1,000円
【期　間】　ご入会いただいた月より１年間
【特　典】　1．期間内の定期演奏会に、１口につき１名様を無料ご招待
2．その他演奏活動のご案内
3．定期演奏会プログラムへのご芳名の掲載

お申込み・入会に関するお問合せ　Tel&Fax 075-605-0123 (西村)　E-mail：tomo@kyotophilo.com

京都フィロムジカ管弦楽団ホームページ

http://www.kyotophilo.com/

過去の演奏曲も紹介しております。是非一度ご覧ください。